1．「下種（げしゅ）の期間」
～土壁に咲く花を夢見て～

国土技術政策総合研究所　防火研究グループ　水上　点睛

2004年７月18日、福井県嶺北地方は明け方より激しい豪雨に見舞われた。福井市内を流れる足羽川が決壊するなど、66棟が全壊、約55,000世帯に避難指示・勧告が出る激甚災害に至っている。勝山市にある実家の父から、後片付けの手伝いに帰ってきてくれまいかとの連絡が入り、ちょうど大学の夏休みに入ったばかりの私は、特急雷鳥に乗って正月ぶりの帰省を果たした。母屋北側の土壁が全体的に崩れ落ち、露わになった竹木舞の下地を前に、堆積した土を一輪車に積み上げては運び出す。大学入学以来、田植えや稲刈りを手伝うこともなくなって、不意に訪れた２人きりの協働作業の気恥ずかしさからか、はたまた梅雨明けの太陽が照りつける蒸し暑さに閉口したのか、父との会話の糸口を見つけられずにいた。そんな中、壁の隙よりこぼれ出た古新聞が、旧仮名遣いで報じる遥か昔の出来事を、詰まりながらも声に出したのがきっかけで、父から思いもよらない話を聞くこととなった。それは我々の前に立つこの壁が、のみならずこの家全体が、３年前に他界した私の祖父と、私の知らない曽祖父が、文字通り自らの手で建てたものだというのである。双方ともに大工ではなく百姓である。しかも古新聞が示す年代は昭和初期。私が生まれた年から高々、半世紀も下らない手に届くような過去に、家とは自分の手でつくるものだったという現実に、私は目を見開かされる思いがした。仮にも大学で建築を専攻している私が、家を当たり前のように商品として見ていたことを恥じた。生みの親である祖父を看取った上で、役目を終えたかのように崩れた土壁を見て、この日、私の内にあった既成概念の壁も崩れ去っていった。

その半年前の2003年12月、私が神戸大学で所属していた震災復興を専門とする研究室で、大地震が起こったインド、グジャラート州へ復興調査に向かった。現地の被災地では、私たちの袖を引っ張って、競い合うように我が家へと案内する屈託のない子供達の笑顔があったが、地震から１年を迎えつつあったにもかかわらず、どこも未だに瓦礫の山の状態であった。子供たちが一輪車を押して家の再建を手伝いながら、「ほら、ここがお風呂で、ここが居間になるんだ」と指し示す先には、かろうじてそれと分かる基礎のみで、1995年の阪神淡路大震災からの急速な復興を見ているだけに、日本に誇りを感じる程、見た目に復興が進んでいなかった。ところがである。現地で取材を進めていくうちに、インドでは材料支給の復興を行っていることが分かった。また地震で崩れた伝統的なインドの家屋は、アドベ造と呼ばれ

写真１　祖父の家と土蔵

る日干し煉瓦を積み重ねた家が多かった為、材料だけでなく、地震に強くするための方法を教え、自分たちで家をつくるように促したのである。それを聞いて、復興のスピードに時間がかかっていることに納得がいったし、なにより全てを失ったはずの子供たちが、地震からわずか１年で見せるこんなにも素敵な笑顔を見て、心の復興は神戸よりもよっぽど早いと感じた。当時、震災から10年を迎えようとしていた神戸では、震災で家を失った高齢者が、復興マンションでの新たな暮らしを手にしたものの、かつてのコミュニティから分断されたことで、人知れず亡くなる震災孤独死が報じられていた。失ったものから立ち直るためには、他から与えられるもので埋めるのでなく、自ら夢を膨らませて埋める必要があることを、額に汗して誇らしげに指さす子供の顔が物語っていた。そして家そのものではなく、自らの手で家をつくるというその行為こそが、こんなにも人に夢や希望そして自信を与えるものなのだと思い知らされた。

本連載は、インドの子供たちに見たような、大人になると、あるいは専門化することで忘れてしまいがちな、純粋無垢な視点を取り戻そうと、彼らに学んで、私が素人はだしで試行錯誤した家づくりの軌跡を紹介するものである。私は防火が専門であり、土壁と防火についての研究も紹介していきたいと思うが、大工のみならず左官に関わる話については、読者諸氏にとって釈迦に説法な部分もあり、また素人ゆえの非効率な作業工程等、読むに堪えない内容もあると思う。無邪気な子供の泥遊びと思ってご容赦願いたい。私はただ、精巧な職人技術と平行して存在した、おらが土壁の可能性を是非掘下げてみたいと思っている。それは建築そのものの可能性と不可分であり、建築をその名の通り、「建てる」と「築く」すなわち動詞として関わることで、祖父が、インドの子供たちが見せた、拙くも自らの人生を賭して築く家の中に、新たな可能性を見出せればと思っている。

実際に土壁は、素人が動詞として家に関わるために、以下の点で欠かせない。

・施工について、製造された製品ではなく、身近な環境から調達できる材料を元に始められる
・自由水により溶融・凝固する可塑性を持つため、やり直しがきく
・鏝１つあれば、特殊な工具を必要としない
・床の間に好んで用いられるように、人工物でありながら、他を生かしつつ自らは主張しない

特に最後の点は、あらゆるものを包み込み育む大地のような存在であり、本連載を通して、土壁に建築の可能性の種を播き、願わくばその花を咲かせてみたく、冒頭のタイトルとした。しばらくの間、お付き合い願えれば幸いである。

写真２　インド復興調査時の子供達とアドベ造の家